



7月 第7回コンプリヘンシブ・リハビリテーション懇話会

7月8日、第7回コンプリヘンシブ・リハビリテーション懇話会を主催しました。CRASEED 関連病院の多職種200名以上にご参加頂き、病院同士が繋がるネットワークの重要性を再確認しました。



8月 日本医療機能評価機構認定

8月4日、リハビリテーション病院として、日本医療機能評価機構の認定を受けました。開院から10年を経て、より質の高いリハビリテーション医療を提供することを目指して受審しました。今後も、皆様から信頼される病院であり続けたいと思います。



8月 夏祭り

8月25日、毎年恒例の夏祭りを開催しました。法人太鼓部の迫力の演奏に、職員による縁日に加え、バトントワリングの世界チャンピオン田和聖也さんが、素晴らしい演技を披露してくださいました。動画をfacebookに上げていますので、ぜひご覧ください。



12月 クリスマス会

12月15日、一足早いクリスマス会が行われました。クリスマスソングの合唱と、職員有志によるジャズバンド演奏のあとは、プレゼントと職員手作りのクリスマスカードが配られ、笑顔一杯のクリスマス会になりました。



IPPO

- 1面: Topicks -広報誌創刊にむけて-
- 2面: 回復期の先端的なリハビリテーション 慢性期コラム
- 3面: リハビリテーションを支える プロフェッショナル -Vol.1- 音楽療法士 診療実績データ
- 4面: 関リハの足跡 篤友会レポート



Topicks 関西リハビリテーション病院 広報誌創刊にむけて

このたび関西リハビリテーション病院の広報誌を発行させていただくことになりましたので、一言ご挨拶申し上げます。

当院は2005年の設立以来、一貫して回復期を中心としたリハビリテーション医療に携わって参りました。今年が14年目となります。この期間に回復期リハビリテーション医療に求められるものが随分と変化してきました。2000年に始まった回復期リハビリテーション病床制度ですが、リハビリ室面積や機器、携わる医療職の人員、勤務体制などの構造のみを求める当初の要件が、リハビリ提供時間や重症者の受入れなどのリハビリ医療の過程を求める要件も追加され、更に近年は受入れた患者様の在宅復帰率や重症者の改善率、日常生活自立度(FIM)の利得などの成果をも求められるように変遷してきております。最近の診療報酬改定では成果主義のハードルの高さが毎回更新されています。

医療を受けられる患者様にとっては短期間で質が高く効率のよいリハビリテーション医療を受けられる、メリットの多い制度設計になってきているのですが、その分私たち医療提供者はより一層の研鑽を積み、知識・技術・コミュニケーション力の向上を目指さねばなりません。

また近年リハビリテーション医療は、脳科学や運動力学などの基礎研究の発展が臨床分野に還元応用されることにより目覚ましい発展を遂げてきており、検査、診断、薬物治療、ロボティクス治療などのあらゆる面で変革を迎えている時期に当たります。やがて最新のがんゲノム治療、iPS細胞による再生医療などの実用化時代を迎え、リハビリテーション医療の果たすべき役割が増大していくことは明白です。

この広報誌は年に3回ほどの発刊を予定しておりますが、これら変革に当院が如何に対応しているかを皆様にお伝えすることを目的としております。紙面には、リハビリテーションにかかわる直近のトピックス・回復期リハビリテーション医療の動向や新しい機器紹介・回復期以外(慢性期)のリハビリテーション医療の動向・リハビリを担う職種紹介・当院の治療成績・篤友会の他事業所レポートなどを、項目ごとに連載していく予定です。広報誌のタイトルは、当院のCorporate Identityのロゴマーク形状から「一歩を踏み出す」IPPOと名付けました。ぜひご一読いただき、当院の取り組みへのご理解を賜れば幸いです。

関西リハビリテーション病院
院長 坂本知三郎

第1回 法人レポート

篤友会リハビリテーションクリニック

〒560-0083 豊中市新千里西町 2-24-18 TEL: 06-6833-0131

リハビリテーションで “その人らしい生活” を支援する

■ 当クリニックはリハビリテーション医による総合的な診察・処方のもと、PT・OT・STのリハビリテーションを提供するリハビリテーション専門のクリニックです。患者様一人一人の在宅生活に合わせて訪問リハビリテーション・外来リハビリテーションを提供しています。

■ 入院中のカスタムメイドのプログラムで獲得した能力を日々の生活で実践することは簡単ではありません。ご自宅に退院した時から新しい生活が始まり日々生じる様々な変化に対応していくことが必要になります。我々は専門医のもとその人らしい生活が実践できるように目標を設定し効果的なリハビリテーションを提供します。



当院リハの特徴

社会復帰外来

必要に応じて就労支援関連施設と連携しながら、復職や新規就労などの社会復帰を目的とした支援を行っております。

装具外来

入院中に作成した装具のアフターフォローや生活環境に応じた修正や再作製をリハ専門医・PT・装具士と協力して行います。

先端リハビリテーション

先端機器を用いたニューロリハビリテーションや認知行動療法に基づいた慢性疼痛に対するリハビリテーションを行っております。

身障診断

身体障害者手帳(肢体不自由・音声言語)の申請書類作成のための診察を行います。

医療法人 篤友会
関西リハビリテーション病院
〒560-0054 大阪府豊中市桜の町 3-11-1

TEL 06-6857-7756
FAX 06-6857-7757
E-mail wwwinfo.kansai-reha.jp
HP http://www.kansai-reha.jp

HomePage



Facebook



回復期の 先端的なリハビリテーション



この度、当院に新たな先端的リハ機器「ウェルウォーク WW-1000」が導入されました。

回復期リハビリテーションに求められるものは多くありますが、中でも移動手段としての歩行の獲得は、重要視されています。歩いて移動できることで生活範囲が広がり、病前に近い生活が送れる可能性が高くなる為です。

ウェルウォーク WW-1000 は、歩く速度に合わせて動く「トレッドミル」や足の位置を確認できる「大型モニター」、麻痺した脚に装着して膝の屈伸を補助する「ロボット脚」などから構成されています。一般的に理学療法士が行う歩行トレーニングは、転倒に注意しながら患者さまの側方や後方で体や手足を支えながら、脚が自分で振り出せない人にはその介助を同時に行います。しかし、転倒を防ぐあまり、時に過介助になることもあり、結果として患者さまの自立を妨げる要因の一つでもありました。

このウェルウォーク WW-1000 は、専用のハーネスを装着し、軽く吊り上げた状態で歩行訓練を行うため倒れる心配がありません。さらに、装着したロボット脚は、体重を掛けると脚を支え、振り出す際にはアシストしてくれます。そのアシスト量も患者さまの状態によって「うまく補助(介助)する」ように設定を変更でき、従来の歩行トレーニングのような「補助(介助)しすぎる」事はありません。つまり、安全を確保した上で、使用する方の状態に合わせた歩行トレーニングを積極的に行えることが可能です。ウェルウォーク WW-1000 に

は、運動学習理論に基づいたフィードバック支援機能も備わっており、大型モニターを通して足の着く位置や体の姿勢に対するフィードバックを行えます。また、音声によって麻痺した脚への荷重を促す機能なども備わっており、視覚と聴覚からのフィードバックが同時に行えます。「自分で歩く」という意識をより一層サポートしてくれるリハビリテーション機器となっています。

慢性期 コラム

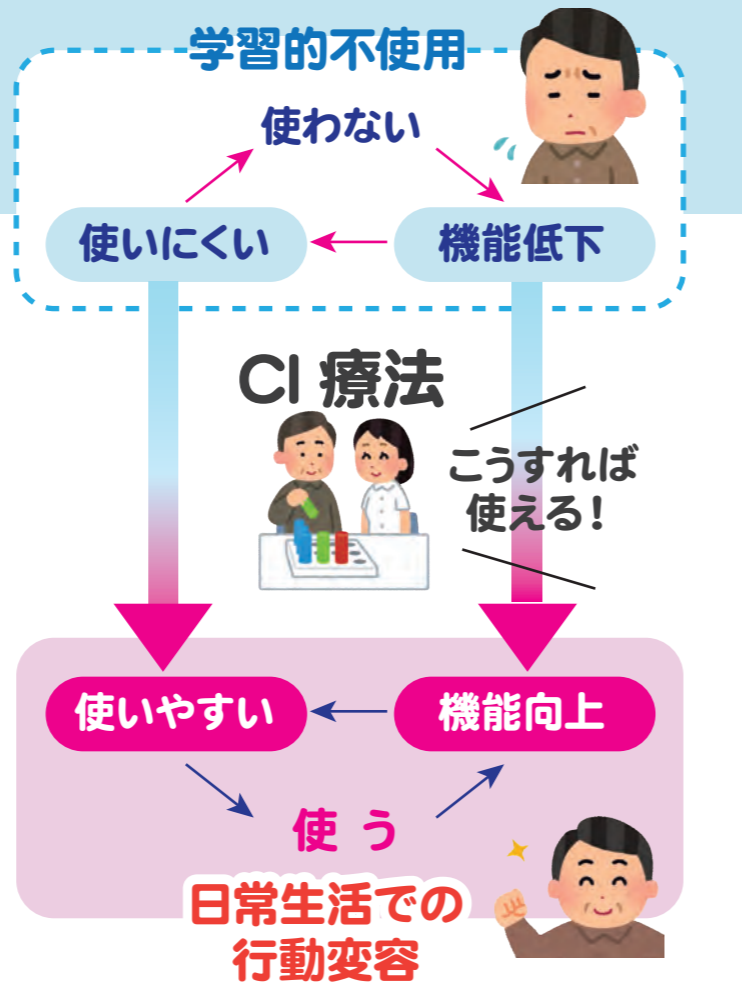
CI療法の 基本的な考え方

Constraint-induced movement therapy (以下 CI 療法) とは、1980 年代に Taub らが開発した治療法で、当院では兵庫医科大学の道免教授の指導の下、開院当初から導入してきました。発症から年月が経過した脳血管疾患患者に対しても回復の可能性があると、現在慢性期のみならず、急性期・回復期などからも注目されている治療法です。今回はこの CI 療法の基本的な考え方を紹介します。

「学習的不使用」という言葉があります。麻痺手を使用して人前で恥ずかしい思いをした、頑張って麻痺手を使ってみたけど上手く行かなかった…。そんな事を繰り返すうちに、麻痺手を使うことに消極的になり、使わないことで筋力や可動性が低下。本来の機能を発揮できなくなり、機能低下により使用し難いから使わない…。そんな悪循環の状態を「学習的不使用」と言います。

これに対して、先進的機器や装具などを併用しながら、まずは機能向上を図り、同時に「こうすれば麻痺手を使える」という使用方法を提案していくことで、実際の生活での麻痺手の使用を習慣化していくこと。これにより、麻痺手を自然に生活の中で使用していく行動変容を促して行くことが、CI療法の基本的な考え方となります。

次回は、当院で行っている、具体的な CI 療法の内容についてお伝えします。



リハビリテーションを支えるプロフェッショナル Vol.1

音楽療法士



音楽を通じた関わりの中で、患者様の心身の回復を援助する

■ どのような方が音楽療法を受けられていますか？

もともと音楽がお好きだった方はもちろん、入院生活の中で気分転換を図りたい方、他の患者様との交流を期待される方、退院後の生きがいに音楽活動をやりたいと考えておられる方など、入院中の患者様はどなたでも受けていただけます。また、気分が沈みがちな方や覚醒レベルが低い方、発声や発語が難しい方に対して職員が音楽療法をお勧めすることもあります。

■ 患者様との関わりで気をつけていることは？

音楽は多くの方に親しまれやすい娯楽の一つです。それぞれの患者様に応じた音楽を提供し、楽しんでいただけることを大切にしています。また、人の心には自ら回復する力が備わっているとされています。患者様に寄り添い、自らの回復を援助できるように関わっています。

たとえ病気や怪我で障害があったとしても入院生活でその人らしさを継続できるように、また退院後も当法人の外来リハビリや、療養病棟に従事している音楽療法士に引き継ぐなど、これからの生活もサポートできるように取り組んでいます。

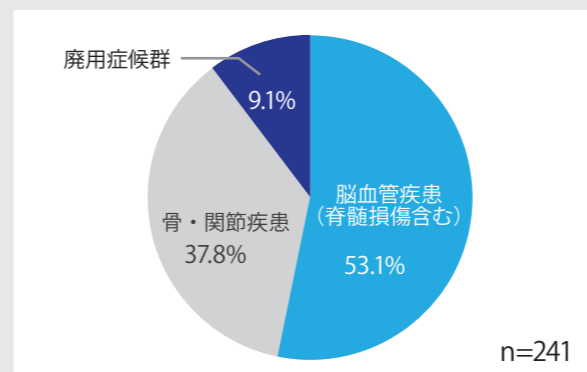
音楽療法は、音楽を通して人間の心や身体、社会活動の支援や回復をめざす療法です。現在、医療法人篤友会では4名の音楽療法士が働いており、そのうち2名が関西リハビリテーション病院で働いています。当法人の音楽療法士は、大学で音楽療法士としての専門教育を受け、日本音楽療法学会が実施する認定試験に合格した者が従事しています。



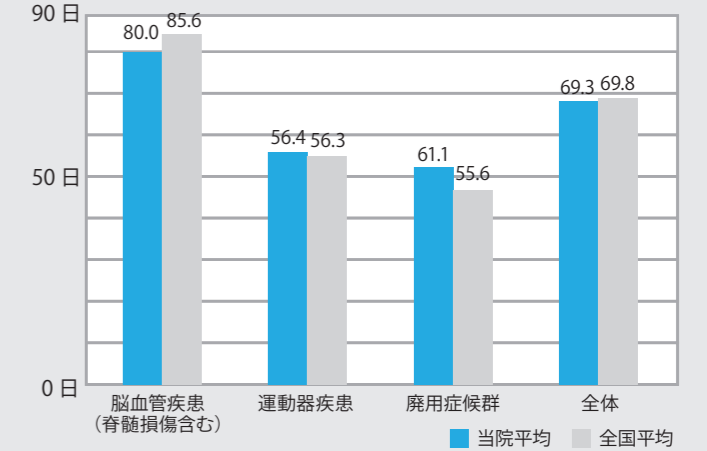
診療実績データ 《H29.9~12》

※当院平均は H29.9~12 に退院された方の平均値、全国平均は H28.4~H29.3 の平均値

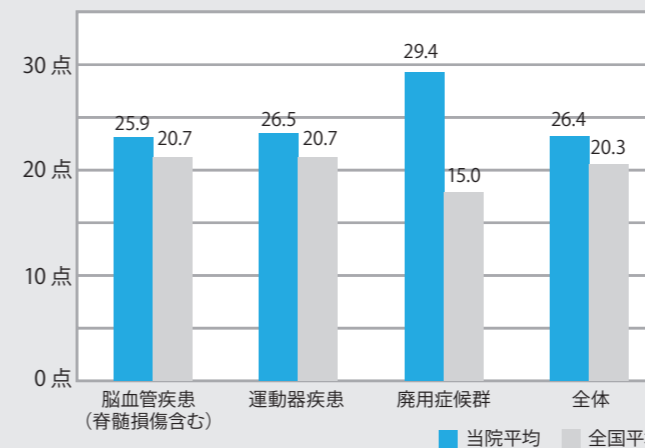
退院患者割合



入院期間



FIM 利得



在宅復帰率

